

CCT 2011

10th Anniversary

DATES | **November 3** thurs. - **5** sat., 2011

VENUE | **Kobe International Exhibition Hall, Portopia Hotel**



齋藤 滋

湘南鎌倉総合病院、札幌東徳洲会病院

私がPCIを初めて行ったのは、1981年の春でした。当時はもちろん、9Frのガイドカテを用いて、Gruentzigが最初にSchneider社と共に制作したOn-the-wireのバルーンを用いました。当時はほとんどPCIに関する知識が無かったにもかかわらず、4例中2例で成功しました。それから29年間の過ぎました。人生の約半分をPCIと共に過ごしてきたことになりすると同時に、日本のPCIの歴史の全てを見てきました。

29年前の日本は高度経済成長期であり、経済が急速に拡大し、日本人の全てが明るい未来を夢見ていました。実際、"Japan as No.1!"という経済書物が話題になったのです。日本人は自分たちが第二次大戦の焼野原から今や世界経済をリードする国を作り上げた、そのような自身に溢れていました。

しかし、そこには大きな落とし穴があったのです。繁栄の頂点で、皆浮かれ、理念を忘れ、やがて繁栄そのものが人生の目標になっていったのです。その結果、人々は勤勉さを失い、幻に酔いしれ、これまでの価値観を破壊し、バブル経済真っ只中に進んでいったのです。その後の日本経済の凋落と、新興勢力の台頭については皆味わっていることでしょう。まさしく、平家物語の「奢れるものは久しからず」が、そのまま繰り返されたのです。

私が初めて外国でPCIを行うために、中国・北京を訪れたのは、未だ「天安門事件」の影が濃く残る1990年12月のことでした。当時の中国は、1983年に西安で第一例目のPCIが行われたにもかかわらず、未だ中国全土でも通算500例にしか達しない、という状態でした。造影剤のボトルも存在せず、胃洗滌に用いるような大きなガラス容器に、看護師さんが一生懸命20mlの造影剤アンプルの口を切って、造影剤を注いでいました。そのガラス容器から貴重な金属製三連活栓に至るチューブはゴム管でし、ゴム手袋も何回も滅菌を繰り返していたものでした。国家循環器病センターである阜外心臓病院循環器カテ室には、古い東芝のマシンがありましたが、画像はものすごく悪いものでした。北京医科大学(現在は北京大学医学部)附属第一病院のマシンは、かつて存在していたフランスCGR社製の古いものでしたが、朝力カテ室に行ってみると、マシンが立ち上がり、一生懸命技師さんが修復に努めていました。しかしながら、マシンは復旧せず、患者さんを北京市政府循環器病センターである安貞病院に移送して治療しました。これらはほんの20年前のことなのです。現在の中国のカテ室の状況を鑑みると、とても

信じられない光景でした。この間、中国は目覚ましい発展を遂げ、年間5,000例のPCIを行う施設も出現し、今やPCI年間症例数は日本を追い越した、とも言われています。

自分で29年前の間で初めてPCIを行った時のこと、そして20年前に一人ぼっちで、言葉の通じない北京に降り立ち、ものすごいカルチャー・ショックの中で崩れそうになりながらも、頑張っただけでPCIを成功させた時のこと、それらを思い出します。あの頃の自分はとても強かった。

北京を訪れた日を境に、僕の目は世界に開かれました。最近のキューバ訪問を含め、未だ日本人がPCIを行ったことの無い国あるいは地域をどれだけ訪れてきたことでしょう。

その中で学んだことは色々ありますが、重要と思われる三点についてここでは書きましょう。一つ目は、医療の持つ力の凄さです。医療を通じて、どんな宗教や文化あるいは、政治の壁を越えて私たちはその国の懐に入っていくことができます。医療というのは、国々にとって大切な国家主権の表れの一つであり、その社会を映す鏡でもあるのです。二つ目は、どんな国や地域の人々とも、医療を通じて心を通わせることができる、ということです。そこで重要なことは、相手に対する尊敬と自分に対する反省です。これが無ければ心を通わせることはできません。三つ目には、歴史との関わりです。色々な国々でかつて日本が第二次大戦中にその国の人々に与えた忘れがたき思い出に、何回も遭遇しました。ある国では、それまで英語でしか私に話しかけなかった高名な先生が、突然、「私はかつて日本軍によって、日本名に改名させられていました」と、とても流暢な日本語で話しかけてきました。ある国では、「死んでもいいから、日本人にこの私の体に触れて欲しくない」と、言われました。ある国では、「私は昔、日本軍の捕虜となり、泰緬鉄道建設に従事させられました」と、言われました。泰緬鉄道というのは、映画「戦場にかける橋」にもなったように、多くの捕虜と現地の人々に過酷な労働を強いて、日本軍がバンコクからヤンゴンまで建設した鉄道で、その工事の過程で、実に工事従事者の半分が亡くなられた、というものです。私自身、戦後の生まれでありますので、直接これらの歴史的事実とは関わってはいません。しかし、日本人として過去の歴史の重みから逃れることは決してできないのです。

医療というのは、医学という科学に裏付けられ、医術という技術を社会の中で実践していくことであり、その実践には、高い倫理観と深い人間愛が必要です。CCTはこれまで、日本から優れたPCI技術を世界に向けて発信してきましたし、今後ともそれを続けていきます。そして、CCTがリードするPCIが単なる医術ではなく、医療として広く世界に浸透し、多くの患者さんを助けるためには、歴史と社会を理解し、自らの行いに深く思いを巡らせ、相手を尊敬する姿勢が必要でしょう。これが私自身に対する、そして皆に発するメッセージです。

TCT 2010 Geoffrey O. Hartzler Master Clinical Operator Award, 日本人オペレーター受賞



池野 文昭
CCT事務局長

2010年9月、米国ワシントンDC、世界最大のライブ形式の研究會であるTCT2010において、日本人オペレーターに対し、Geoffrey O. Hartzler Master Clinical Operator Awardが送られた。この賞は、冠動脈形成術の初期開拓者であり、その匠な腕、技術によりPCIの世界を築きあげてきた重鎮Dr. Geoffrey O. Hartzler氏にちなんだ賞であり、専門医のなかでも高い水準を設定し、革新者として際立った国際的活躍があり、類いまれなる技術的ロールモデルとしての資質が認められたインターベンション専門医に授与されるものである。

そして、今年は、加藤修(豊橋ハートセンター、CCT理事長)、鈴木孝彦(豊橋ハートセンター、CCT理事)、故玉井秀男(草津ハートセンター、CCT理事) 3名の日本人に贈られた。

加藤氏、鈴木氏は故・玉井氏のご家族とともに、メイン会場での授賞式にて壇上に登った。



TCTコースディレクターであるGregg W. Stone氏(Columbia University Medical Center, New York, N.Y)により、「加藤氏、鈴木氏、及び故・玉井氏は、CTO病変に対するアプローチおよびその治療に新たな方法を生み出す最前線に立ち続けてこられました」と説明があった。また、もう一人のTCTコースディレクターであるMartin B. Leon氏(Columbia University Medical Center, New York, N.Y.)は、3氏を最も卓越した技術を有する術者であり革新者であることに加え、「彼らの変革をもたらしたテクニックを他の医師に教授すべきライブコースにおける指導的権威である」として称賛している。

また、3人を代表し、加藤修氏が「私の実績には、どれ一つとして仲間を切り離せるものはありません。すべては常に友人らのたゆまぬ努力に結びついているのです。」と受賞の喜びを語った。

加藤氏、鈴木氏と故・玉井氏は、医師としてのキャリアの大半を、インターベンションの技術開発、成績向上を目標とし、テク

ニックとテクノロジーの改善に特化し捧げてきた。

CTO病変の研究にだけでなく、3氏はその他の数多くの専門的なアイデアをこの分野に導いてきた。こうしたアイデアには、side branchテクニック、パラレルワイヤーテクニック、IVUSガイド、そしてキッキングワイヤーアプローチやナックルワイヤーテクニック、septal dilatationを含むCARTやIVUSガイドreverse CART法など、近年の逆行性アプローチ法などが含まれる。

Stone氏は、さらに「CTO病変に対する血管形成術の創始者であるGeoffrey Hartzlerの名に由来するこの賞は彼らが受賞するにまさにふさわしい賞といえます」と述べ、「Hartzler氏の志を継ぎながら、加藤氏、鈴木氏、故・玉井氏によってCTO病変治療に全く新しい一連のテクニックやツールが導入され、何百万人もの患者が現在ではCABGとは対照的なバルーン血管形成術やステント留置術といった低侵襲治療を受けることが可能となりました」と続けた。

そして、最後に、加藤氏より将来展望として、「次なるステップは、こうした技術やテクノロジーを世界各地へと促進するための方法を案出し、大規模臨床試験におけるCTO病変再開通の有効性を科学的に証明することである」とし、「そして我々の実績を通じて、さらに多くの患者様に利益がもたらされることを望んでおります」と語った。

日本人医師の技術は世界的にもその高い水準が認められている。その中でも日本だけでなく、世界を牽引してきた3氏の受賞は、大きな希望と自信を与えてくれるものとなった。また、技術だけでなく、3氏の新しい治療方法、治療テクニック開発、国際協力、人柄にも付与された賞であり、メイン会場に埋め尽くされた数千人の聴衆の拍手がいつまでも続いていた。

